ったことに反対であったのです。

ある夜のことです。娘のモトを寝かしつけていたリンは、季昌によばれました。

「何か、御用ですか。」

寝しずまった家の中で、しばらく黙って考えにふけっていた季昌は、静かな口調で、しかし、きっぱりと、

「キリスト教を信ずることはやめなさい。さもなければ、この家から出ていきなさい。」

というのです。突然な言い方にリンは驚きました。

「いやです。私にはとてもできません。それだけはどうしてもできません。私はいやです。」

「出ていかないならば、――どうしても出ていかぬというならば、私が出ていく。」